

あっと言う間に年末ですね。師走といいます、ベルギーではいつも通り。走り回ってお仕事をしているような人はなかなか見ることができませんね。それよりも12月になると、こちらの人たちの表情が穏やかになるような気がします。特にクリスマスが近づくと、どの顔にもクリスマスが無事に迎えることのできる喜びや、最愛の人への贈り物を手にして街を歩く楽しみなどが凝縮し、みんなの表情が変わるのだと思います。吐く息が白くなる夕刻、クリスマスマーケットでホットワインを楽しんだり、フリッツを楽しんだりして、冬の夜長を楽しむようになるのもこの時期ですよ。私もこの時期になるといつも以上に街に出かけ、他の人たちの幸せそうな表情を見ながらビールを飲むのが楽しみになります。しかしこちらで楽しむことのできないものもあります。それは日本の12月歳時記の1つだと思われるベートーベンの「第九交響曲」を聴くことです。日本ではたくさんのコンサートがあるのですがね。

ドイツのボンで生まれた作曲家のベートーベンはほとんどの方がご存知かと思います。が、おじいさんが現在のベルギーのMechelen生まれで、今でもMechelenには「ベートーベン通り」が残っていることは案外知られていません。さてこの作曲家が作った合唱付きの交響曲第9番は12月になると日本中で耳にすることができます。人気のある曲ですので色々な挿話があります。日本での初演は1918年6月1日に徳島県の坂東俘虜収容所に収容されていた第一次世界大戦のドイツ兵たちによって行われました。当時の日本は国際法を遵守することが世界に通用する国になると考えており、また収容所の松江豊寿所長が武士道精神を持って敗者である俘虜たちに非常に紳士的な扱いをしていたと言われていました。そんな俘虜収容所の兵士たちはドイツの芸術だけでなく建築や牧畜などの技術をも地元の人たち広げていました。

この曲が年末に初めて演奏されたのは昭和18年、当時の東京音楽学校（現在の東京芸術大学音楽部）において、繰上げ卒業する出陣学徒壮行のための音楽会でした。その時は第4楽章だけ演奏されたそうです。そして戦争が終り、無事に戻ってきた学生たちが戦没した学生たちへの鎮魂歌として12月に演奏したそうです。それからこの名曲は本家のドイツでは想像もつかないほど日本各地に広がって行きます。この曲がなぜこれほど日本中に広がっていったのかは諸説ありますが、私は次の話が真実かと思います。第二次世界大戦後、日本の復興と共に各地に楽団が創設されました。そして年末になるとどこの楽団も団員に配る年越し用の「餅代」（一種のボーナスのようなもの）が必要になりました。しかし通常の劇場での演奏では通常の収入しかありません。すると餅代を配ることができません。そこで考えたのは当時楽団と同じように増えていったアマチュア合唱団を演奏に加えることでした。そして演奏する合唱団のメンバーに当日のチケットを割り当て、劇場を一杯にする作戦なのでした。一方、合唱団のメンバーは元々アマチュア活動ですので、楽団と一緒にしかも有名な交響曲の合唱ができることに喜びを感じ親族一同を招待してその晴れ姿を披露しようとしていました。そして割り当てられたチケットはすべてさばかれ、劇場も満員となり、楽団は合唱団のメンバーが売りさばいたチケット代で餅代を捻出することができたそうです。この話が各地の楽団に広がり、12月は「第九交響曲」の月になったそうです。実は私もそのような楽団の謀にはまり、と言うかお祭り好きが高じて、一度だけ参加したことがあります。今から25年も前のことでした。「大阪21世紀計画」と言うイベントの一環で大阪城ホールにて「一万人の第九」と呼ばれるイベントがありました。一万人で第九を21世紀まで歌い続けようという企画でした。昨年2007年は25回目の記念すべきコンサートになったそうです。当時は誰でも参加でき、最年少は5歳、最年長は80歳を超える方だったと記憶しています（今は抽選で参加者が決まります）。そして数回の練習に参加することで当日の合唱団員となれました。しかし一万人も参加者が集まることはできなかったようです。私の練習チームも50人ほどの人数で、当日に1万人ものメンバーが揃うとは思われませんでした。しかし当日になり、イベントの企画者の思うとおり、合唱団に割り当てられたチケットを持って、合唱団員の身内や友人が大挙して集まり、大阪城ホールは一万人の人で埋まりました。そしてなんと観衆に一番有名なフレーズの1部を歌わせるという企画が進みました。当日のお客さんたちもある程度この曲に興味を持っている

人が多く、開演前に知らされたこの企画に大喜び。そして数回の臨時レッスンがあり、今は亡き山本直純さんの指揮で大阪城ホールは文字通り「一万人の第九」と言うおそらく世界で初めての演奏会が大盛況のうちに終わりました。後日、友人となったドイツ人と話をしているこのコンサートの一部がドイツのニュース番組で報道されていたと聞き、本家でも注目されたイベントだったと改めて思いました。

シラーによって書かれた詩にベートーベン自身が手を加えた歌詞の意味は良く理解することができません。やはり宗教的な背景なしでは理解することが難しい歌詞だと思います。しかしベートーベンの曲は、初めて聞く者もその繊細さ、不安感、安心感、そして最終章に爆発的に現れる歓喜を堪能することができます。クラシックに興味のない方も、是非一度全曲を聴いて欲しいと思います。できれば生の演奏を聴けるといいですね。

ベルギーでは音楽が日本に比べて身近に感じます。中規模の都市なら必ずと言ってよいほど劇場があり、クラシックだけでなくジャズなどのコンサートも頻繁にあります。もちろんモネ劇場でオペラを鑑賞することはこちらでの駐在時代での大きな教養となると思います。

私も音楽好きの端くれです。そして音楽の楽しみを体験してもらうために、毎年1度プロの音楽家を幼稚園に招いて、園児とそのお母さんたちに生の楽器の音色を聞いてもらっています。今年は初めて一部のお母さんも参加してもらい、「おもちゃのシンフォニー」の木管楽器版を合奏しました。身近にあるトライアングルやカスタネット、私が作った特性ラッパなどを使って合奏を楽しみました。「音を楽しむ」ことが音楽です。何度もこの曲のCDを聞いた園児たちもこの曲に合わせておもちゃを使って遊んでいました。音楽には国境がありません。音楽には老若男女はありません。楽しいとき苦しいとき口に出てくる音楽は、私の生活の糧のひとつです。

《つづく》

参考 WEB 坂東俘虜収容所、ベートーベン「第九交響曲」、一万人の第九 など